

スペイン民俗音楽「ファンダンゴ」

“Fandango” : Folk Music of Spain

大 槻 寛
Hiroshi OTSUKI

（平成7年10月2日受理）

RESUMEN

Esta pequeña tesis reflexiona sobre el fandango, que es una de las tres representaciones de la música folklórica española con cante y baile con acompañamiento instrumental. (jota, seguidilla y fandango)

Existen muchas variedades de fandango en casi toda la tierra española actual.

Hay muchos tipos, algunos tienen sólo relaciones comunes por el nombre, otros no sólo tienen relaciones musicales, sino también relaciones con otros tipos de cante y baile. En esta tesis, se estudia el fandango andaluz que se dice más típico y prototipo de todos los fandangos.

En su primera parte, se escribe y se explica el origen y variantes del fandango primitivo.

A continuación en su segunda parte, se hace un análisis musical detallado del fandango andaluz. Y, se hace una comparación musical detallada con el fandango que se llama tipo del noroeste de la Península Ibérica.

Para hacer esta tesis, hemos recibido la inestimable ayuda y dirección del Don. Emilio Rey, catedrático del Real Conservatorio Superior de Música de Madrid.

Se lo agradecemos de todo corazón.

はじめに

本論は、スペインの代表的な民俗音楽の一つである「ファンダンゴ」について書かれたものである。この音楽は18世紀に大変流行して国内はもとより、ヨーロッパの音楽家達に知られるようになったといわれている。モーツァルトの「フィガロの結婚」、グルックのバレエ音楽「ドン・ファン」、リムスキー・コルサコフの「スペイン狂詩曲」、グラナドスの「ゴイエスカス」や、その他のスペインを題材にした音楽芸術作品の中に数多く用いられている。

スペイン民俗音楽の分類では楽器伴奏による歌と舞踊の分野で、「ホタ」「セギディーリャ」と並び最も代表的と言われるタイプの1つである。現在のスペインでは殆ど全土に「ファンダンゴ」と呼ばれる音楽もしくは、その地名を付されたファンダンゴが存在している。しかしながら音楽的な骨格において明かな共通性を持つと思われる一連のグループと、音楽的關係が曖

味で名称だけが「ファンダンゴ」と言われるものや、音楽的には明らかに他のタイプに分類され得るものが混在している。これらについての分類・考察を本論では以下のように2部に分けて書き表した。

第一部では、やや古風なものをも含む主として文献による今までのファンダンゴに関する起源の定説や、それから一般的派生・変化したと思われる音楽舞曲について一般的解説をした。

第二部では、最もオリジナルであり音楽的なファンダンゴの骨格を持つと言われているアンダルシア・タイプのもを楽譜を例として詳細な考察をした。更に、それらの結果を基にイベリア半島北西部に広く見られる異種のファンダンゴ（ホタ風と呼ばれることもある）を前者と比較して、どのように判断するのが適当なのかスペイン音楽学会や筆者の見解を述べている。

これらの分類研究は、我国では勿論のことスペイン本国に於いても充分に行われているとは言いがたい状態である。その上、スペイン本国の研究状態とその成果の伝達、研究者との交流等が我が国では余りにも希薄である。仮に何か伝わっているとしても、そのほとんどが言葉の直訳的輸入であって具体的な音楽内容を充分吟味した結果のものであるとは思えない。本論は完全とは言えないまでも、その調性感やリズム的・和声的特徴といった音楽の重要な要素に踏み込んで解説している。この点で本論が僅かでも役立てれば幸いである。

（本論の欧文は断りの無い限り全てスペイン語を用いている。引用文献資料の邦訳は全て筆者によるものであり、その責を負うものである。またスペイン地図は全編に渡って必要なものなので第1部の最後に挿入した。特別な指示は文中にないので適宜参照していただきたい。）

第1部 過去に於ける定説等一般的解説

語源等について

まず「ファンダンゴ」の語源としてポルトガル語のfado「ファド」であろうと言う意見に異説を唱える意見は現在も見当たらない。「ファド」はポルトガルを代表する哀調を帯びた民謡として同国内に広く普及しているものであるが、これと「ファンダンゴ」がどのような音楽的継続関連性を持ちうるのかは明らかではない。この点に関しては今後の研究課題である。語としての源は更に遡って、ラテン語のfatum=destino（宿命）であろうと言われている。¹⁾

発生の時期についての諸説

一群の歴史家達に依れば、ファンダンゴは17世紀後半か18世紀初頭には良く知られるようになっていた様である。他の歴史家達は、それが語られた期日は不明確であるとしながらも「ファンダンゴ」はインドに滞在していた諸王によってもたらされた舞踊であり、快適で祝祭の奏楽の音に合わせて作られたものと断定していた様である。これらのファンダンゴについて何度も繰り返される引用は、長い年月の口伝のなかで少しずつ修正されてきたものであろう。そしてそれらの根拠の乏しい仮説（口伝）は、どれも皆最終的には固まった一つの源流を辿ることが出来るのではないかという曖昧な考えをつくっているように見える。現在の音楽学会でも一点を導き出そうという考え方や観点が全く無くなった訳ではないが、その様な研究態度は全体的には否定的にとらえられている。

文書として、我々の知り得る最古の確証物は、1712年アリカンテの聖堂参事会所属主任司祭によってラテン語で書かれた記録にさかのぼる事が出来る。そこには、カディスのファンダンゴに関して次のように書かれた記述があるのでそれを引用する。^②

「私はカディスでこの踊りを知った。この踊りは気ままな（自由な）ステップに依っていることで有名であり。（当時はステップの形式を尊重する事が踊りの正しい方法と考えられていた事からの驚きか：筆者注）

この町のすべての家々と地区で、生き生きと行われているように見える。これは観客達よって信じられないほどのやり方で賞賛されている。そしてただ単に下層の女達だけでなく、よりまじめな女性達や上流の人々によっても賞賛されている。（これも上流階級の人々が正しい方法でない踊りを好むなどということが考えられなかった当時の常識を感じさせる：筆者注）」

当時のカディスは中南米アメリカへの一大玄関口であり、文化交流の接点でもあった。活気あふれる貿易港として栄えた記録や証拠は充分にある。この点や前出の記録と合わせてファンダンゴのラテンアメリカ起源説やカナリア諸島起源説が、ある時期には数多く唱えられた。現在もこれを完全に否定する意見はない様であるが、後述するように取り立てて強くこの様な起源説を唱えている研究者も見当たらない。他にアフリカ起源やアラビヤ起源を唱える研究者もいなかった訳ではない。^③

これらは、ある時期の流行から学問的考え方も常に影響を受けてきたという観点を養生するには（事の真偽を別として）役立つことである。

芸術世界の実用として、或いは何か特定の舞曲を指し示す「ファンダンゴ」が初めて登場するのは、18世紀初頭の「田舎娘の恋人」という作者不詳の幕間劇においての事である。^④

この時期以降18世紀全体に渡って、多くの人々や特に芸術家達によって作品に取り上げられ、描かれて、直接・間接的に広く知られるようになった。

直接的・派生的音楽について

現在、本来のファンダンゴの派生変化カテゴリーに入りうるものとして第一に取り上げられるのはマラゲーニャ Malagueñaである。以下ロンデーニャ Rondaña, グラナイーナ Granaina, メディア・グラナイーナ Media Granaina, ムルシアーナ Muruciana, ファンダンギーリャ Fandanguillaと続き、少し分離して考えられてきているものとしては、カルタヘネーラ Cartagenera, タランテ Tarante, ミネラ Minera等々、主にアンダルシア地方からムルシアにかけての地名（同時にその土地の人々をも指している）が付された音楽がこれに相当する。

少し注意が必要なのはロンデーニャである。この音楽について我が国では、「ロンダ」Rondaと混同されて記憶されている場合がある。（音楽理解はあくまで音そのものから判断するのが最も重要であるという簡単明瞭な事が如何に難しいかという事を示している。スペインでも必ずしもその様な歴史を正しく辿ってきたとは言い難い状況であるので、やむを得ないことではあるが）

前者は、アンダルシアの地名で固有のもの（ファンダンゴという固有の舞曲）を表している。後者は一般的な行為の習慣 Rondar = 「回る」から「夜回り」或いは「窓辺の恋人への歌」等へ発展し、その様な歌の音楽や楽団を指している。（Cante de ronda, Rondalla）^⑤



スペイン地図

第2部 アンダルシア・ファンダンゴの音楽的分析（楽譜1-3参照）

形式について

通常、音楽形式は以下のような2つのパートから構成されている。（楽譜-1参照）
初めのパートは、ヴァリエーション又はイントロダクションと呼ばれる楽器によるものである。リズムック、或いはメロディックな旋律を用いて4・8・16小節フレーズより構成される。それらはアンダルシア音階をベースに繰り広げられ、「ミ」の旋法Modo de Miの主和音に終止する。

引き続きコプラCopla（歌）のパートに入る。この部分は踊りが歌と共に踊られるところで、しばしば3回まで繰り返される事が多いようである。

コプラには、8音節「四行詩」La Cuarteta Octosilábicaが用いられ、4小節単位による6つの音楽的フレーズが構成される。（詩の長短によって楽譜-1の様に1フレーズが必ずしも4小節にならないことや、構成が3フレーズの場合もある）⁶⁾

それらのフレーズは、ヴァリエーションの終止後、多くの場合いきなり長調で始まる。この和声進行は、あたかもJ. S. Bachのフリギア旋法を祖先とする長・短調コラルの伴奏づけによく現れるものと感じが似ている。（短調のドミナントから平行長調の主和音への進行）そして次に述べるように、各フレーズの終止はファンダンゴを分類する場合最も重要なポイントとなる独特な構成を持っている。

各フレーズの終止について

アンダルシアタイプの顕著な個性として1, 3, 5フレーズは必ず長調主和音に全終止することが確定している。2, 4フレーズはそれぞれ4度・5度の和音に終止する。（カスティージャやラ・マンチャタイプのものでは2, 4、フレーズの終止が必ずしも限定的なものではなく、6度や7度の和音上に終止するものも発見される。がしかし、このことは和声的意味合いにおいて殆ど同一と見なしても構わない事と思える。）

大部分のものは第5フレーズに留意することなく第6フレーズがアンダルシア音階に再び戻る。それは楽器によるヴァリエーションのフレーズへと再びつなぐために、常に必要不可欠なことでもある。このコプラの終わり方が「ホタ」や「セギディーリャ」には見られない独特な音楽的雰囲気を作り出す。

コプラの配列について

最も良く用いられる歌詞は8音節「四行詩」によるものであるが、歌詞として「五行詩」が用いられる例もない訳ではない。両方のテキストが一般的にどの様に音楽フレーズとして配列されるのかを次のような簡略図にして示した。

音楽フレーズ（終止和音）	四行詩の場合	五行詩の場合
第1フレーズ（I）	二又は一行目の詩	二又は一行目の詩
第2フレーズ（IV）	一行目	一行目
第3フレーズ（I）	二行目	二行目
第4フレーズ（X）	三行目	三行目

第5フレーズ (I)

四行目

四行目

第6フレーズ (Modo de Mi) 一行目

五行目

Variaciones

Copla

do no lle - va lu - ce - ro Que
 tris - te que va - la Lu - - - na - - - cuan
 - - - do - - - no lle - va - lu - ce - ro!
 A - si es - tá mi co - ra - zón el dí - a -
 que - - - no te - ve - o el
 dí - a que no te ve - - - o

楽譜 - 1

(楽譜 - 1 は「四行詩」が使われており第六フレーズは四行目が繰り返されている。)

コプラの配列には多くの例外があり、それほど厳密なものではない。「四行詩」等についての詳しい説明は前々年度・前年度研究報告「ホタ」-その1, 「セギディーリャ」の拙稿をご覧頂きたい。

リズムの特徴について

基本的には大きな単位の2拍子にグルーピングされる3拍子に書かれる事が多い。従って記譜としては4分の3拍子や、それを2小節分まとめた8分の6拍子に通常記される。Allegrettoと速度表示された楽譜が多く見られるが、実際の場面ではかなり幅があると思われる。ファンダンゴの表面に書かれる通常の記譜と根底に流れるリズムを検討すると、次のよう

なこの音楽の独特なリズムが浮かび上がってくる。(楽譜-2参照)

この根底のリズム、特に弱拍部に感じられるアクセントは恐らくこの音楽の最も古いオリジナルな要素と考えられる。アンダルシアに於ける圧倒的なギターの普及とその奏法から自然に出てくるものが関係している可能性を否定出来得ない。「ホタ」や「セギディーリャ」のアクセントは基本的に強拍部を意識させるものである。

通常の記譜	
根底のリズム	

楽譜-2

「北西部」のファンダンゴとの比較

ここに取り上げた楽譜(楽譜-3)は、レオン県PROVINCIA de LEON,のアントニャン・デル・ヴァジェ村Antoñan del Valle (県都レオンから西南西へ約40km)でファンダンゴとして扱われ、歌われてきているものである。^{m)}

音符の単位は異なるが、(楽譜-1の2小節分を1小節にまとめて比較して頂きたい)譜面上は、非常に良く似た音楽である事がみてとれる。特にリズムの面に於いてはそっくりとも言える。この曲と類似したものはこの地方だけでも多くあり、今までも「ホタ」と似ていると形容されてきたこともあるが、大きくはファンダンゴに分類されていたものである。それでは実

「Con el permiso de ustedes」
 Antoñan del Valle

Con el per-mi-so de us-te-des me ponga-to-car un
 bai-le y de mi gus-to se-rí-a
 no per-ju-di-car a na-die. Ya no va la ni-ña por agua a la
 fue-n-te, ya no va la ni-ña, ya no se di-vier-te. Ya no va la ni-ña por agua a la
 rro-yo, ya no va la ni-ña, que no va su no-vio.

(楽譜-3)

際アンダルシアタイプのファンダンゴ音楽と比較して何処がどの様に異なるのであろうか。まず第1にリズムの潜在的且つ全体的なアクセントに注目する事が肝要である。この曲は基本リズムとして、どうしても弱拍部より強拍部の方が全体に優れている。

次にフレーズの終止はどうであろうか。明らかにドミナント・トニカの交互の繰り返しが顕著な構造で出来ている。アンダルシアタイプは音楽の下地に明らかに「ミ」の旋法を持っている。そしてそれが最も古い素材であって、その上に若干ある時代以降の近代和声の影響が歌の作り方に作用しているものと考えられる。従ってこの音楽（楽譜-3）はアンダルシアファンダンゴと根本的に異なるものである。むしろ完全に「ホタ」の基本的要素（主和音と属7の繰り返し）に適合するものであろう。

サラマンカ音楽院のミゲル・マンツァーノ教授はこれらのグループを「ファンダンゴ風ホタ」jotas fandanguerasと名付けて分類する事を学会へ提唱している。バスク地方やナバラ地方にも「ファンダンゴ」の名称のついた曲が多くあるが、大半はアクセントとしての潜在リズムや和声の流れを分析するとマンツァーノ氏の提唱する「ホタ」の分類に入るものがほとんどである。⁸⁾

ファンダンゴ・フラメンコについて

フラメンコを体系的に捉えることなくその1部を云々することは、あまり学術的な研究として意味深いことではない。しかしながら民俗音楽のファンダンゴ（通常形容詞としてのフラメンコがつかないもの、又はクラシカル・ファンダンゴとも呼称される）とファンダンゴ・フラメンコとは音楽として非常に近く密接な関係があると言われている。特にその普及がアンダルシア一帯という同じエリアを持っているので厳密な意味で両者の明確な違いは無いと言っても良いであろう。ただフラメンコの音楽学的研究はその個人的伝達や個人芸としての特質から科学的・客観的研究が充分なされていない。少し古いものだが、この分野の音楽学的研究書として知られるイポリトHipolito Rossy著作の「カンテ・ホンドの理論」Teoría del cante jondo⁹⁾より、ファンダンゴについて書かれた部分や(d)その他を基に筆者が整理分類したものを示す。

音楽の速度としてrápido（速い）に分類されるのはウエルバのファンダンゴ Fandango de Huelvaと呼ばれるものである。これらは今世紀前半にウエルバ地方で大流行したものである。1925年以降、個人的に創作され「フラメンコ・オペラ」Opera Framenca時代に主役となった芸術的ファンダンゴFandango Artísticoは、このウエルバのファンダンゴが基となっているものである。ファンダンギーリョFandanguilloもこれと同じ意味を指す場合がある。いずれにしても音楽的には楽譜-1にあるような調性感・終止和声・フレーズ構成をもっているものである。

中庸な速度moderatoに属するものとして、アロスノのファンダンゴFandango de AlosnoやヴェルディアレスVerdialesがある。前者は1992年7月4日に亡くなった今世紀最大のフラメンコの歌手と言われるカマロンCamarón de la IslaのCDでも馴染みの曲である。広くゆったりとしたアンダルシアの平原を歌い上げるように、やや長めのフレーズのカンテ（歌）の部分（長調で最後はミの旋法へつながる）を挟んでギターの高い独奏部分がゆったりとしてはいてもリズムに奏でられる。

ヴェルディアレスはアンダルシアに於ける田舎のファンダンゴの最もプリミティブな名前と

して知られている。この語の意味は熟しているけれど緑色の状態で保存する食用オリーブの実 Verdial からきているもので、これをつまみに踊ったり歌ったりするこの地方の集まり(pandas と呼ばれる)での音楽を指すようになったと言われている。殆ど絶え間の無いギターのラスゲアード奏法によるリズム的な伴奏の中で歌が歌われる。両者とも音楽構造は基本的なアンダルシアタイプを踏襲している。

ゆっくりしたlento速度のものとしては、アルメリアのファンダンゴFandango de Almeríaがある。これは勿論名前の示すとおりアルメリア地方のものだが、一説にはマラガ地方のファンダンゴから生まれたという見解もある。また他の研究では鉱山地区に於ける主役としてタラントTarantaのオリジナルとなる特殊な因子を持っていたとも言われている。

これらの他にマラゲーニャMalagueñaや、それから創られたと言われているハベラJabera(これは同名による歌手の名前からきているという説と、アバスHabas=そらまめ売りからきていると言う説がある)、ロンデーニャ、グラナディーナ、メディア・グラナディーナ等と言ったように古典的ファンダンゴの分類に準じる名前のものがある。

おわりに

イベリア半島全体に於ける民俗音楽の分布はペドレル¹⁰⁾の指摘するように一大積層構造の様相を示しており、解明が進めば進むほど、ある民俗音楽の起源の限定や一方的影響を安易に言うことが、如何に間違いを含みやすい事であるのかが浮き彫りになってきている。

特に音楽的な分析を熟考すればするほど、単に旋律が似ているからとか、リズムが似ているといったきわめて表層的な観点から分類することが如何に全体像を理解する為に不適切な事か過去の歴史が示しているし、まして名称が同一などということは民俗音楽の分類には殆ど役に立たないという点が明らかになりつつある。

幸いなことに、私はこの数年来、マドリッド王立音楽院民俗音楽学教授エミリオ・レイ先生による包括的なスペイン民俗音楽の指導を受け、更にスペイン音楽学会(SEdeM)の研究者各位による数多くの指摘や教示を受ける機会を持つことが出来得た。本紀要の前々年度・前年度の拙稿、「ホタ」「セギディーリャ」に引き続き今回「ファンダンゴ」の考察をして、ようやく粗いながらも全体像に取り組むための最低限の観点を得ることが出来たのは、誠に諸先生方のお陰であると感謝している。未だ、ようやく一枚目の表層を取り除く作業に着手したばかりの段階ではあるが、三稿を合わせ読んで頂くことによって全体的考察の主旨を理解していただき、且つ各位からのご指摘を頂きたくここに本稿を発表したものである。

主要参考文献

- a) Josep Crivilléi Bargalló; Historia de la música española, 7. El folklore musical (Alianza Editorial, 1983, Madrid)
- b) R.P. Dionisio Preciado; Folklore Español (STVDIVM EDICIONES, 1969, Madrid)
- c) Miguel Manzano; Cancionero Leonés (Diputación Provincial de León, 1993, León)
- d) J. Blas Vega, M. Ríos Ruiz; DICCIONARIO ENCICLOPÉDICO ILUSTRADO DEL FLAMENCO (Editorial Cinterco, 1988, Madrid)
- e) Diccionario ANAYA de la Lengua (1991, Madrid)

注釈

- 1) 一説にはfatus=hado宿命・運命(d)出典
- 2) 主要参考文献(d)Vol-1P-284, 同じく(a)p-222、両方ともA.Capmany著作からの出典と思われる。
- 3) 抽稿「ホタ」-その1 (静岡大学教育学部研究報告人文・社会科学篇44号p-97)でも紹介したが、1920年代アラビア学研究者のリベラ教授による各種民俗音楽に関する各種の著作物が出版された。その影響は大で、大半のスペイン文化の源泉をアラブの影響とする彼の考え方が当時流行した。ファンダンゴも彼を中心にアラビア起源説が唱えられた。現在のスペインはEC加入という大きな流れが国中を席卷しているので、アラビアからの文化的影響やそういった研究をやや軽視する傾向があるように筆者には思える。
(b)p-108出典
- 4) (a)p-222, (d)p-284には1705年と書かれている。
- 5) 前出(3)の抽稿P-103参照。
- 6) (a)p-223
- 7) Miguel Manzano の採譜による。
- 8) Emilio Reyはjotas afandangadasという言葉を用いているが殆ど同じと見て差し支えないであろう。
- 9) 1966年Barcelonaで出版
- 10) Felipe Pedrell, 抽稿(3)p-106参照